「見守る」ではなく「魅せる」託児所 ㊸

誰一人退室しないサイエンスショー

私は娘と17年間にわたってサイエンスショーをしています。きっかけは、娘が2歳の時に始めた親子漫才。当初はプロのように巧みな漫才をするわけではなく、お風呂や食卓など普段の家族だんらんの時間を使って、言葉の掛け合いを行っていただけでした。しかし、「好きこそものの上手なれ」とはよく言ったもので、2年、3年と漫才を続けるうちにそれなりの形となり、5歳の時にはプロ参加の漫才大会で受賞できるレベルまで成長しました。

「これだけの話術があればサイエンスショーができるかも？」。当時の科学館が対象とするお客さんは小学校高学年以上でした。しかし、実際は小学校低学年や幼児などが増え、低年齢化するお客さんへの対応に悩んでいました。そんな中、テンポよく漫才をする娘を見て、「子どもが子どもに教えるサイエンスショー」がひらめきました。

早速、5歳の娘と幼児や小学校低学年の子どもたちを対象としたサイエンスショーに着手。自分たちと同じくらいの小さなサイエンスパフォーマーに子どもたちは興味津々！ 「1分に1回はお客さんに問いかけて飽きないようにしよう」「漫才のノウハウを生かして笑いのある展開を考えよう」などとショーをするたびに話し合い、「お客さんが誰一人退出しないサイエンスショー」を最終目標に娘と試行錯誤しました。

そして、サイエンスショー転向10年目には、サイエンスショーの全国大会である「科学の鉄人」やテレビ番組内での大会「所さんの目がテン！ 実験グランプリ」で優勝し、ありがたいことに全国各地からお声掛けいただけるようになりました。

今年はテレビ局から「幼児を1時間預かってほしい」という不思議な依頼がきました。テレビ番組で育児をテーマにした講演会を企画しており、「保護者が講演会に参加している間、その子どもたちを預かり、サイエンスショーをしてほしい」という内容でした。2歳児が数名含まれており難易度は高そうでしたが、われわれにとってはまさにピッタリの依頼。17年の経験を全てぶつけてサイエンスショーに挑戦。いつでもすぐに保護者のもとに戻ることができるように、講演会会場の横の部屋でサイエンスショーを行い、扉も開けた状態で実施しましたが、誰一人退室することなく終演しました。

当初は、「1時間以上も小さな子どもを見守ることが出来るのかな？」と不安でしたが、見守るどころか子どもたちが夢中でこちらを見てきました。くぎ付けにさせることで、素直でおとなしく、終始みんなが笑顔の状態で預かることに成功しました。

本年度で大学を卒業し、社会人となる娘とのコンビはこれで解消。「誰一人退室しない子どもたちを魅了するサイエンスショー」に到達し、有終の美を飾ることができました。

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
© 京都新聞社 無断複製・転載を禁じます